「自由」な報道姿勢を学ぶ

初のマスコミ・インターンシップに参加して

中央大学経済学部4年
顧暁虹（コギョウコウ）

私は経済学部国際経済学科4年生で、中国の上海から来日した女子留学生です。この夏、学部のマスコミ・インターンシップ制度を利用し、日本の新聞社を勉強する目的で、「石橋ゼミ」にチャレンジしました。正式な単位が認められる、このゼミの存在を知らない人も多いかと思います。そこで私の経験を通して見た、新しいインターンシップと新聞社の素顔を皆さんに紹介させていただきます。

▼事前授業で意識高める

私のゼミは、夏のインターンシップを前提にした授業を行います。ということは、その夏の各新聞社がどれほどの学生を受け入れてくださるかで、ゼミの採用人数が決まるからです。今年は中大のインターンシップ受入れに3社（日経、読売、産経）が応じてくださいました。3社で8人です。つまり、8人の狭き門に30数人の応募があったそうです。

ゼミに入る際は「小論文」と「面接」がありました。皆さん、人一倍マスコミに興味をもっているようで、「是非とも新聞社の現場で勉強したい」と自己PRします。私も当然、同じような台詞を述べたと思います。8人（男子5、女子3）のうち、私はただ1人4年生でした。

さぁ、ゼミの始まりです。新聞社の世界は一般企業と違って、私たちには想像つきません。特に私の場合は、中国の留学生という甘えは許されません。講義は「新聞の基礎知識」から始まって、論文のテーマに移ります。「常識的なことにはとらわれず、あくまで自分の考えで」と、その都度いわれます。なぜ「自分の考えか」というと、新聞記者を志す学生にとって、〝文章の上達〟より、まずは〝記者の目〟をつかむことが大事であり、その〝記者の目〟とは、常に正義の立場に立って、物事を客観視することです。つまり、「ジャーナリスト精神」を指します。

「ジャーナリスト精神」、それは情報の多元化時代に入っても、なお強い社会的支持を受けている新聞の強みといわれています。そこで「新聞は単にニュースを報道する場ではなく、社会に存在するあらゆる歪みに対して最後まで真実を突き止め、矛盾・不正と戦うことだ」と30年以上の経験を持つ先生は、私たちの頭に叩き込みました。

こうして前期に「ジャーナリスト精神」を一応、頭の中で勉強した私たち8人は、3社にそれぞれグループ分けされました。新聞社の入社試験前に、ひと足早く記者の実体験ができる研修なので、みんな首を長くして待っていたと思います。

▼産経新聞編集局
――まず整理部研修

いよいよ2週間のインターンシップの始まりです。私たち産経グループ（3人）は8月12日に産経本社に集合、さっそく他校生との顔合わせです。東大、早稲田、日大、帝京か

ら来た学生は7人でした。顔も知らない学生同士がこれをきっかけに2週間一緒に過ごすことになり、自己紹介や将来について話を交わしていると、新しい友達が出来たというより、むしろ、旧友に会ったような感じでした。また、今回の学生受入れは同社も第1回目の試みとあって、研修中に熊坂隆光編集局長からも直接、ジャーナリストの心得を話していただきました。

研修に参加した中大生組。左から青木啓悟さん、森重敦司さん、顧（筆者）

さて、研修第1弾は整理部といわれました。「整理部って一体、なにをするところなの？」とヒソヒソ話があちこちで始まりました。実は取材現場から本社に送られた原稿は、政治、経済、国際など、あらゆる分野の原稿が整理部のデスクに届けられます。そこで各面担当者は記事の扱いを判断し、見出しをつける作業を行います。これまで記者の仕事は、もっぱら取材と原稿書きと思い込んでいた私たちは、ここで初めて新聞製作の別な顔を見せられたわけです。つまり、取材がピッチャーで、整理部がキャッチャーの役目だそうです。

競争の激しい新聞業界では、各社とも整理部を重視する傾向にあり、地方から上がってきた若い記者は、まず整理部に配属されるそうです。整理部の仕事がこなせないようでは、1人前の記者として認められないそうです。私は地方版の埼玉版と経済面を2日間体験し、担当記者から紙面を作るときのルールを勉強しました。例えば、記事の見出しをつけるとき、まず、その記事の1番重要なところをつかみ、記事の内容は新しい事件なのか、それとも事件の発生はすでに報道され、継続中の事件なのか、などの要素を瞬時に把握しなければならないなど、説明を聞いているだけで頭が混乱しそうでした。

▼社会部でキツイ質問に絶句

整理部の研修のあと、私たちは警視庁の記者クラブへ向かいました。本社ビルと対照的に、細く狭い記者クラブに入った瞬間、私は思わず部屋のなかを見回しました。隙間なく並んだ机の上になんとも無造作に置かれたパソコン、原稿用紙、本、そして山積みの新聞……。「へぇー、こんな狭いところで仕事しているんだ」というのが正直な感想でした。

緊張している私たちの相手をしてくださるのは警視庁クラブの井口文彦キャップ。豪快な口調、鋭い視線。警察の事情聴取のように私たちの学習生活などを聞いたあと、自分の記者生活を話し始めました。「夜討ち・朝駆けは事件を追う記者の基本だ。朝4時、5時、夜12時、1時、事件が起きればいつでもどこでも出向く。事件関係者に一言を聞き出すために4時間も5時間も待つことはザラだ」とおっしゃいました。

「こんな厳しい生活に果たして女性が勤まるのか」と思っていたら、いました、女性の事件記者か。スラリとしたスタイルにジーンズ姿が良く似合うと同僚にいわれている長嶋さんです。ところが取材の難しさを私たちに淡々と話している長嶋さんは、私には〝たくましい印象〟に映りました。

3日間にわたる社会部での最後日

静かだが熱気のこもる編集局＝東京・大手町の産経新聞東京本社

の研修は東京地裁でした。裁判所記者にとっての現場は〝法廷〟が多く、記者でありながら弁護士並みの法律知識が必要とされると聞きました。また、法廷の傍聴席で生の裁判を傍聴しているうち、世の中のさまざまな人間の生き方、その複雑な陰影を深く考えてしまいました。社会では日夜、事件が発生しています。社に戻り、平田篤州社会部長から「事件取材に当たって、加害者と被害者双方にかかわる記者自身は、どんな姿勢であるべきか」と質問をぶつけられ、私たちは一瞬、言葉をなくしました。

「訴えようとして訴えることのできない人間に代わって訴える。この姿勢は産経新聞の信条として、昔もいまも変わりません。6年前の神戸市児童連続殺傷事件で、産経記者は事件後、被害者少女の母親を訪問しました。娘を奪われた母親として、加害者の少年を恨みますが、恨むだけでは生きていけない。病院に運ばれた娘が最後に見せてくれた笑顔で、自分が生きていく勇気を与えてくれた」――平田部長のお話をうかがったあと、私は「愛を持って生きる」ということは、「愛を持って、不正と戦う」ことでもあると考えるようになりました。

▼政治の透明度の役割は、やはり新聞

〝霞が関〟の官庁街を首相番記者に案内していただきました。徒歩10分の範囲内に日本の政治機関のほとんどが集中しています。その集中的な構造を一度も不思議に思わなかった私が、まず感じたことは〝政治は権力の集合体だ〟ということ。そして7人の学生を引き連れて、どこへでも1枚の記者証明書で入れる記者の存在は、なんといってもマスメディアの〝自由の力強さ〟の証でした。

ここ数年来、各新聞社は政治面の記事に〝自社の論調〟や記者の主観を入れる傾向があり、それについて読者から賛否両論の意見が寄せられているらしいのです。私は、もし今回の研修に参加しなければ、「新聞には主観を入れるべきではない」という意見に賛成したと思いますが、「事情に一番詳しい人に意見を聞く」という観点で考えれば、必ずしもそうとも言いきれないと思いました。

例えば、〝政治の透明度〟や〝民衆の政治〟という言葉は、しばしばメディアを通じて論じられてはいますが、いくら自由といっても一般庶民には限界があります。そこで〝政治の透明度〟の役割を果たすのは、やはり新聞です。

21世紀のメディア情報の多元化につれて、ニュースは新聞だけのものではなくなりました。確かにIT情報技術を用いるニュースは、新聞と比べると一段と〝早くて分かりやすい〟とは思いますし、毎日1時間もテレビを見ればその場の用は足ります。しかし、新聞を日に1時間を読

むことによって、ニュースだけではなく、それに関連する知識も理解することが出来ます。それは私の「新聞が好き」な理由でもあるのです。

▼報道に対する日中の姿勢

研修最後の日、産経の人事部の方から私たち全員に、今回の研修の感想を聞かれました。日大で放送研究会に所属している石川さんが、研修で「記者」という職業にすっかり魅了され、記者への希望が固まったといっていたのが印象的でした。

私の場合は、〝自由を守る〟日本のマスメディアに関心を持ち、インターンシップに参加しました。日中国交回復以来、新聞業界では「記者交流」を実施してきましたが、異なる政治制度、価値観のなか、マスメディアの日中両国の交流は一般の民間業界よりはるかに困難であり、今回のインターンシップの最中も、日本の記者の方から中国のマスメディア報道のあり方について、いろいろ指摘されました。

特に政治や外交面では中国の場合は新聞やテレビ局がほとんど国営であるため、どうしても国の〝悪口〟を言えない立場に立たされます。それとは対照的に、日本のマスメディアは〝非〟であれば国をも批判するという、根本的に制度がまったく異なります。

偽装牛肉事件の記者会見にも同席する機会があった

中国では古来、〝忠言逆耳〟という諺があって、意味は「良い意見はしばしば辛口であるため、相手が聞き入れない場合が多い」というものです。それにもかかわらず、中国もひと昔前には外国からの忠告に対し、振り向かないという態度を取ってきました。けれどもWTOに加盟後は国際的問題となる法律や人権などについても、いまや中国国内の専門家たちの間でしきりに是非論が交わされています。

特にマスメディア報道でみると、近年、地方のテレビ局や新聞は自由度を徐々にアップし、民間の報道媒体も現れました。中国は先進各国から指摘されたように、これまで国際社会とかけ離れた観念を徐々になくす努力をしていることは事実です。

インターンシップは貴重な体験でした。社内の各部に研修に回る際には、必ずそこの部長さんが対話の時間を設けてくださり、記者クラブの見学も担当デスクが私たちの面倒をみてくださいました。

この機会を与えてくださった石橋先生や産経新聞社に暑く御礼申し上げます。とりわけ、産経新聞の方々が私を日本の一般学生と同様に扱ってくださり、政治や外交などの問題についての意見交換のときも、正直に日本人の考え方を説明していただきました。いま考えると、私にとって一番勉強になったのは、この点だったのではないかと思っています。